



劇団八千代・劇が終了して

な方法を学ぶことでお互いの負担が少なく、赤ちゃんとの時間をより楽しく過ごすことが出来ると感じました。驚いたのはピカからの質問が多く、育児への積極的な姿勢がみられたことです。コツやポイントを丁寧に教えてもらいながら、「上手ですね」とほめられるととても嬉しそうでした。

お母さんが妊娠中の2歳の男の子は、初めてのおんぶでママと同じ目線にびっくりしていましたが、ママと密着していることですぐに安心した様子でした。私は、抱っこはほとんどが新生児なので、首のすわった乳幼児の抱っこやおんぶはとても興味深かったです。

そして、毎年恒例の助産師によるお産劇は、病院編と助産所編の2部構成です。陣痛が発来して助産師へ電話をかける場面から、入院して出産までの流れを笑いあり涙ありのリアリティある劇でした。私も劇を観ながら、「そうそんな感じ」と皆と劇と一緒に入り込んでしまいました。

多くの妊婦さんが、出産は病院で産むものと思っています。しかし、お産劇を観た後の感想では、「初めてのお産なので病院を選んだのですが、劇をみて助産院という選択肢もあると知りました。」や「助産院で産むときの、緊急時の対応を教えてください」など助産院を知り関心を持ってもらう機会にもなりました。また個別相談出来るブースもあり、それぞれの相談事に対して、とても丁寧に対応されていました。助産師はお産だけでなく妊娠の時から産後、子育てまで相談できる専門家であるということも知っていただけたと思います。

この他、子供と楽しめる年賀状の「おひるねアート」や、赤ちゃんとのコミュニケーションツールを学ぶ「ベビーサイン」などユニークで楽しいブースもあり、プレママプレパパ、産後のママパパ、子どもたちが楽しめる場となっていました。参加して頂いた方には、助産師をより身近に感じてもらえる良い機会となったと感じました。今回、私はマタニティフェスタに初めて参加し、話を聞いたり劇を観たりと、とても楽しかったです。たくさんの方に、気負わず楽しく妊娠から出産、子育てまで出来るように、またそれを支援する助産師のことを知ってもらえるよう、来年もマタニティフェスタをたくさんの助産師で盛り上げて行ければと思いました。

母乳の大切さを改めて考える ～日本母乳バンク協会について～

広報委員 高橋 一紗

はじめに

皆さんは、日本母乳バンク協会をご存知でしょうか？母乳育児支援に関わる専門家の方や、NICU所属の方はすでに情報をお持ちかもしれませんが、私は協会の活動については、ほとんど知りませんでした。

母乳育児が母児さらに社会にもたらすメリットはいくつもあります。児へのメリットには、免疫反応の増強、死亡率の低下、疾病予防効果、生活習慣病のリスク低下、発達促進効果が挙げられます。特に、NICUに入院して治療を受ける早産児や疾病を抱える新生児において様々な疾病リスクを軽減する効果が示唆されており母乳栄養のメリットは計り知れないものがあります。超早期産児（在胎28週未満出生の早産児）においては、壊死性腸炎のリスクを最大限に減らすために、母乳を勧めることは特に重要視されています。

その一方で、母体の全身状態が不良な場合や、感染症などの経母乳感染防止などお母さんの母乳が十分に得られないケースがあります。以前の日本には「もらい乳」という文化があり、過去には母親の母乳が十分でない母児に対しては「もらい乳」がごく普通になされていました。しかし、医療の発展とともに母乳が体液由来であることから、感染管理上実施できなくなっており、現在は安全に管理された体制での母乳の提供が求められています。

私たちが母乳育児を希望されている母児を支援するために、必要な児に対しての栄養方法の選択肢のひとつとして情報提供が出来るように「日本母乳バンク協会」の紹介をしたいと思います。

日本母乳バンク協会とは

日本母乳バンク協会は、これから生まれてくる小さい子供が、元気にすくすくと大きくなるために、母乳を与えたいという思いで2017年5月に昭和大学の水野克己先生が設立され、代表理事を務めていらっしゃいます。今回、こよなく母乳を愛していらっしゃる水野先生にお会いして「母乳バンク」について詳しくお話を伺うことが出来ました。

「母乳バンク」とは、自分の子どもが必要とする以上に母乳がたくさん出るお母さんから、余った母乳を寄付していただき、その「ドナーミルク」を適切に検査・保管・管理を行い、タイミングよく「母乳」を必要とする乳児に医療的な見地から「ド

ナーミルク」を適切に提供する仕組みです。

ドナーミルクはNICU入院中の児の母親で分泌過多の状態の人から協力を得ています。感染症・肝炎のスクリーニング結果や輸血歴・喫煙歴・健康状態など必要な母親の情報はすでに揃っているため、スムーズにドナーミルクの提供者として登録することが出来ます。分泌過多の方が、余分な母乳を役立たせたいという方や、中には児を亡くしてしまった後も搾乳を止められずに提供したいという方もいらっしゃいます。そういった方々には、日本母乳バンク協会のホームページからドナーに申し込みをすることが出来ます。申し込み後は、病院まで来てもらい、各種検査や健康チェックを行い、母乳を提供してもらうこととなります。

提供された母乳は最近検査後に低温殺菌処理され、その後も1週間に1回の低温殺菌処理を行い安全に保存、保管されます。

母乳バンクの現状、課題と目標

現在のドナーミルクの保管場所は昭和大学江東豊洲病院の一か所のみです。ドナーミルクの検査・管理など行い、今後の長期間の安全性を担保することも母乳バンクを続ける意義となっています。一度使用された母乳は安全を担保するために20年間保管することになっており、何か問題が生じたときにチェックできるように整えられています。今後はドナーミルクの保管場所や連携機関が増える見込みで、すでにいくつかの機関で準備が進んでいるとのことでした。いずれは日本

全国に設置されることを目標とされていました。

また、超低出生体重児や心疾患を持つ児などにドナーミルクを使用し疾病予防するという施設も徐々に増えてきていると水野先生は仰っていました。日本周産期・新生児医学会学術集会でも、双胎の超低出生体重児に対してドナーミルクを使用した事例の発表もありました。

ドナーミルクを使用する際は、使用したい児の主治医が母乳バンク協会へ連絡し、病院内の倫理委員会の申請が必要になります。即日申請が下りることもあるそうですが、すぐに必要とされているにもかかわらず、数日を要すケースもあるそうです。また、母親が使用したい希望があるが申請が取れずに母乳を飲ませることが出来なかったという例もあり残念ではありません。

そして驚いたことに、今ドナーミルクは無償で提供されており、ドナーや利用者に経済的負担はありません。協会の金銭面での負担額は相当な額だそうですが、それでも水野先生はドナーミルクを普及させ事例を増やすためにもデータを示して推奨していく必要があるのだと仰っていました。

今、助産師に求められていること

先生は「助産師さんには母乳栄養を否定する人はいないと思う。是非多くの助産師さんに母乳栄養が子どもたちにとって必要であることを知ってもらい、必要なお母さんたちに母乳バンクのことを知らせて欲しい。」と最後に語って下さいました。水野先生とお話させていただき、今回改めて母乳育児成功のための10か条(ユニセフ・WHOによる共同声明)の必要性を強く感じました。

助産師は、母児が健やかに成長していくために母乳育児を推進し支援しています。母親が母乳育児を選択できるように、すべての妊産婦に母乳の良い点やその方法をよく知らせ、安心して母乳育児が出来るように支援体制を充実させることが大切であると感じました。

